

— NO. 197 6月号

FOREST NEWS

広げよう
地球と命を守る
森づくり運動



2024年度 指標

- ①パンタナール地域における潜在自然植生の混植密植形式の植樹の実施
- ②国内において累計500本の植樹活動
- ③植樹を通じた環境問題解決のロールモデルをつくる
- ④セミナーを通じて植樹活動の啓蒙
- ⑤他団体との連携

NPO法人 地球の緑を守る会

発行人 高津啓洋

〒121-0072東京都足立区保塚町1-6

Tel:03-6783-4707 Fax:03-6783-5595

ホームページ <http://midori.mond.jp/>



理事長メッセージ

古来より日本人は **森の民だった！**

～日本文化のルーツは “照葉樹林文化” ～

日本人を海洋民族だという人もいますが、そうではありません。また農耕民族でも、狩猟民族でもありません。確かに生活の糧を得る手段であっても、心の拠り所は、当時日本列島全域を覆っていた深い森にありました。1万5千年前の縄文時代から、その豊かな森の恵みを受け、1度も亡びることなく繁栄を続けてきました。つまり「日本人のIDは何か？」と問われたら“森の民だ！”と答えれば間違いのないということです。

われわれの先祖は、森の木々に神が宿ると信じ、樹齢数百年の大樹には必ずといっていいほどしめ縄を張って崇拜し、かたわらに祠（ほくら）をつくってその木を守ってきました。森を自分たちの命の源と信じていたのです。戦後、日本はすっかり欧米化されたといいますが、一方では初詣を始め、ことあるたびに神社を参拝します。

つまりそれは、森に対する信仰心が依然として潜

在意識の中に残っているからではないでしょうか。文科省の調べでは、全国の神社の総数は15万8千か所、全国のコンビニの数が約5万6千店といえますから、その3倍近くの神社があるということです。これもまた、日本人が「森の民」だということを裏づける証拠の一つといえるでしょう。ほんものの森は多層群落をつくります。高木のタブノキやシイノキ、亜高木のヤブツバキやマサキ、低木のアオキやヤツデなど、葉の表面の照りが強い木を他の常緑樹と区別して「照葉樹」と呼んでいます。実はこの照葉樹林帯は、関東地方から西日本を経由し、中国の雲南省や台湾を経て、チベットまで帯状に広がっています。そしてこの照葉樹林帯は広い地球上で唯一この地帯だけなのです。そのため、宮脇博士を始め多くの植物生態学者が、日本文化を「照葉樹林文化」と呼んでいるのです。

足尾銅山の植樹の経過を見学してきました



これまで「森びとプロジェクト」が進めてきた、足尾銅山で行われている植樹プロジェクトに緑の会会員が積極的に参加してきました。経過を見学して、かつて荒廃していたこの地がボランティアたちの尽力によって緑豊かな風景へと変わりつつあるのを目の当たりにし、感動しました。植樹された木々は順調に育ち、生態系の回復が進んでいます。この取り組みは環境保護の重要性を再認識させ、今後も持続可能な社会を目指して活動を続ける決意を新たにしました。

今月のトピック

国内活動

船橋支部では、浜離宮恩賜庭園を訪問し鎮守の森を見学して来ました。潜在自然植生の森の現場で、タブノキの種を468個拾いました。今年の実は大きくブルーベリーと間違える程でした。

中は黄緑の果肉があり、味は歯磨き粉のペーストのようです。鳥がそれを食べて糞と共に出てきたのが白い種（右側）。やや縞模様が見えます



YouTube チャンネル

植樹のギモン答えます ③

私達は、一生のうち
何本植樹したらよいのでしょうか？

